

令和6年度研究推進計画

1. 研究主題

自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする 児童生徒の育成

— 繋がりに着目した道徳教育の創造（2年次） —

2. 研究主題設定の理由

本校児童は、他者の考えを素直に受け入れたり、学習課題に対して、主体的に、粘り強く取り組んだりすることができる。一方、小規模校で各クラス15名程度と小集団での学びが続く児童らは、遊びを含む様々な活動場面において協働する相手が固定化しており、考えが多様性に欠けるという面がある。また、意見の異なる他者と自らの考えを伝え合う中で物事を多面的・多角的に見つめ、意見を練り合って新たな考えを導き出し、自らの考えを広げ、深めていくことに課題が見られる。

これらの課題を踏まえ、本校では、令和4年度から道徳科を研究の中心としてきた。

令和4年度は、研究主題を「自己を見つめ、他者ととともに、よりよく生きようとする児童の育成—『対話』を通して考えを深める道徳科の授業の工夫—」と設定し、研究を進めた。研究の成果としては、児童に行った質問紙調査（「そう思う」から「そう思わない」の4件法）、「人の気持ちがわかる人になりたいと思う」の項目について、「そう思う」と回答した児童が80%から88%に上昇（肯定的評価は95%から97%）したこと、「道徳科の授業では、友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている」の項目について、1年を通じて肯定的評価が高かったこと（94%から95%）などが挙げられる。

一方で、同調査における「道徳科の授業では、自分のことを振り返りながら考えている」「道徳科の授業で勉強したことを、自分の生活に生かしている」「自分のよさが、まわりの人からみとめられていると思う」の項目の調査結果（年度末）は、肯定的評価は94%・83%・79%と概ね高いものの、「そう思う」を選択した児童の割合は54%・40%・26%と他の項目に比べて低い数値に留まっていた。

そこで令和5年度は、道徳教育推進拠点地域事業の中心校として、研究主題を「自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成—道徳科と他教科等との繋がりに着目して—」と設定し、児童生徒が自我関与し、道徳的価値について理解を深める指導の工夫を行うことで道徳科の充実を図ると同時に、道徳科を中心としたプログラムを学校教育全体を俯瞰してデザインすることを目指した。

成果として、拠点地域全体で道徳科を中心としたプログラム（かがやきチャレンジプログラム）を開発できたこと、道徳科の授業の中で多くの児童が考えを深める姿や、実際の生活場面で、道徳的価値について理解を深めたり道徳的行動を実践したりする姿が見られるようになったこと、児童に行った質問紙調査、「道徳科の授業で勉強したことを、自分の生活でいかしている」の項目について、「そう思う」と回答した児童が上学年では、35%から45%に上昇（肯定的評価は79%から90%）したこと等が挙げられる。

一方で、下学年の同調査結果では、「そう思う」と回答した児童が58%から35%に減少（肯定的評価は91%から54%）したこと、道徳科の授業内において考えを深めていると評価することが難しい児童がいること等が課題として挙げられた。

このことは、児童の思考の繋がりを意識した発問の工夫や、道徳科および他教科等で行う評価とそれらの評価を指導に生かしていくこと—いわば指導と評価の一体化—等がじゅうぶんではなかったこ

とが推察される。

そこで、主題解釈と発問との繋がり、児童の思考の繋がりを意識した発問の工夫、他教科等で行われる評価と指導の繋がり等、様々な繋がりに着目し、道徳科の授業づくりから道徳科授業後—あるいは授業前—の生活場面までを含めて一つと捉える道徳教育の創造を行っていくことが、自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成に繋がっていくと考え、本研究主題を設定した。

3. 研究についての基本的な考え方

3.1. 自己の生き方について考えを深め、よりよく生きようとするとは

3.1.1. 「自己の生き方について考えを深める」ことについて

荒木（2021）は、道徳科における重要な学習活動として、「自己を見つめ、自己の生き方について考える（自己との関わりで道徳的価値を捉える）活動と、多面的・多角的に物事を捉える活動」（p. 40）の2つを挙げている。本研究で焦点を当てる1つ目の学習活動、「自己（人間として）の生き方について考えを深める」（括弧内は中学校）ことについて、永田（2017）は、「道徳的価値のよさや意義、困難さ、多様さなどを理解し、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われる」と述べている。また、浅見（2021）は、「伸ばしたい自己を深く見つめられるようにし、それとともに、これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めていくこと」（p. 155）と述べている。

ここからは、自己の生き方について考えを深めるためには、道徳的価値を自分自身に引き寄せて考えること、その活動を通して自分なりに深めた道徳的価値への理解を基に自分自身の生き方に関する思いをもつことが求められていることが分かる。

これらのことから、本研究における自己の生き方についての考えを深めるとは、「道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止め、道徳的諸価値についての理解と自己の生き方を関連付けて考え、自らのこれからの生き方について思いをもつこと」とする。

3.1.2. 「よりよく生きようとする」とは

道徳科の目標である道徳性は、よりよく生きるための基盤となるものであり、道徳教育が目指す方向について、文部科学省（2018）には、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また、国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道徳教育が求めるものである」（p. 15）と述べられている。このことから、道徳科での学びは、道徳科の時間のみならず、様々な生活場面において児童生徒が生かすことを目指したものとすることが分かる。

また、生活場面において児童生徒の道徳性が発揮されることにより、さらにその道徳性は高まり、道徳科の時間の充実が図られるものと考ええる。

このことについて、木原（2021）は、各教科等においてはぐくまれる3つの資質・能力（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性」）は、「道徳教育を推進するための基盤となる力として、各教科等の特質に応じてさまざまに内在している」と述べ、道徳性との有機的な関連が不可欠であることを指摘している。

以上のことから、本研究で目指す、自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の様態を、「道徳的諸価値についての理解と自己の生き方を関連付けて考えたことを基にもった、自らのこれからの生き方についての思いを、生活場面において生かしたりさらに思いを深めたりしようとする姿」とする。

3.2. 繋がりに着目した道徳教育の創造

3.2.1. 道徳科内における繋がりを高める取組

道徳科の時間の充実を目指し、本年度は次の3点を授業づくりの視点とする。

- ① 主題解釈
- ② 発問の工夫
- ③ 道徳科の評価

① 主題解釈

自己の生き方についての考えを深めるために重要となる道徳的価値の理解について、文部科学省(2018)には価値理解・人間理解・他者理解の3つが示されている。令和4年度は、授業を行う教師自身が道徳的価値への理解を深めておくことが大切ではないかと考え、宮里(宮里 2022 : pp. 22-23)が主題を捉える観点として提唱¹している、「その大切さ」「それを行うことの難しさ」「難しさを越えてなおの大切さ」の3つを取り入れ、主題解釈を実施してきた。

主題解釈を行った教員対象に、主題解釈に関わるアンケートを実施したところ、結果は図1のとおりになった。全ての設問に対して肯定的に評価した教師の割合は100%となり、特に、設問1に対して「そう思う」と答えた教師の割合は91%と高く、表1に示した自由記述からも、教師が主題解釈の有効性を実感していることがわかる。また、日々の授業に生かされた(下線部)という記述は、本研究が目指す「よりよく生きようとする児童生徒の育成」に繋がるものであり、教師が主題解釈を行うことが、道徳の時間のみならず全教育活動を通じて児童生徒の道徳性を育むことに少なからず影響を与えたと推察できる。そこで、主題解釈は今年度も継続して行うこととするが、宮里が提唱する3つの観点をコンセプトシート(図3)に取り入れることで、さらに授業展開や発問の工夫、授業での児童の目指す姿までの繋がりを意識できるようにする。

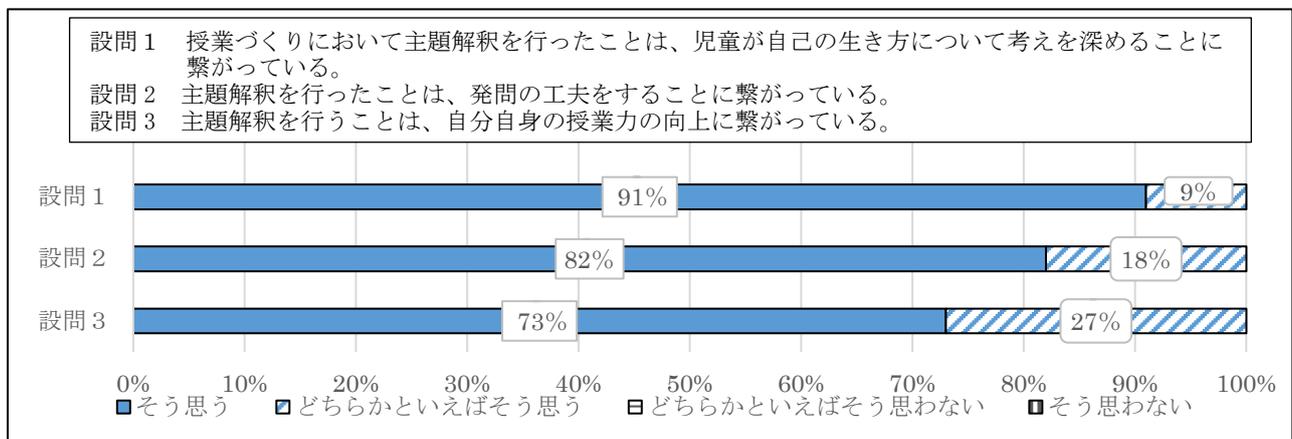


図1 主題解釈に関わるアンケート結果

表1 主題解釈の有効性に関わるアンケートの自由記述

- ・主題解釈は学習活動を仕組むうえで重要だと思った。教師が児童に考えさせたいことが焦点化されていく。軌道修正もできる。
- ・主題解釈を行ったことで、「誰に対しても」優しくすることの難しさ(人間の弱さの部分)に着目でき、そこから展開や発問を考えていけたからです。
- ・研修で主題解釈を行うことによって(中略)日々の自立の授業などで道徳的視点を取り入れて行うことが増えたため。

¹ 宮里(2022)は、1つ目の「その大切さ」を考える過程で自分なりの価値理解が、2つ目の「それを行うことの難しさ」を考える過程で人間理解が始まり、さらに3つ目の「難しさを越えてなおの大切さ」を考える過程で、もう1段階深まった人間理解・価値理解に至ると述べている。これらの3つの観点について、他者と伝え合うプロセスを経ながら、ともに主題を解釈することは、他者理解へと繋がると考えられる。

② 発問の工夫

道徳科の発問は大きく「場面発問・中心発問・テーマ発問・補助発問」の4つに分かれている。荒木（2021）は「場面発問・中心発問だけだと心情理解のみの指導に陥りやすい」と指摘しているが（図2）、本校のこれまでの授業においてもテーマ発問と補助発問の工夫がじゅうぶんではなかったと考え、令和5年度はテーマ発問を意識して学習展開に取り入れた。と同時に、本研究の目指している、児童生徒が自我関与して考え、自身の生活に生かそうとする—自らのこれからの生き方について考えを深めていく—ことを意識した発問の工夫を行ってきた。

このことについて一定の成果は見られたものの、児童の思考の深まり—自己の生き方について考えるを深めること—を評価することが難しい児童がいるという課題も挙げられた。これは、児童の思考の繋がりを予め予想して補助発問を用意しておくことがじゅうぶんに行われていなかったことが要因の1つと思われる。

そこで、コンセプトシートには補助発問を書き入れる欄を設け、藤原光政（2019）に整理されている発問パターンを手掛かりとしながら、児童の思考の繋がり、および広がりや深まりを意識した発問の工夫を行っていくこととする。

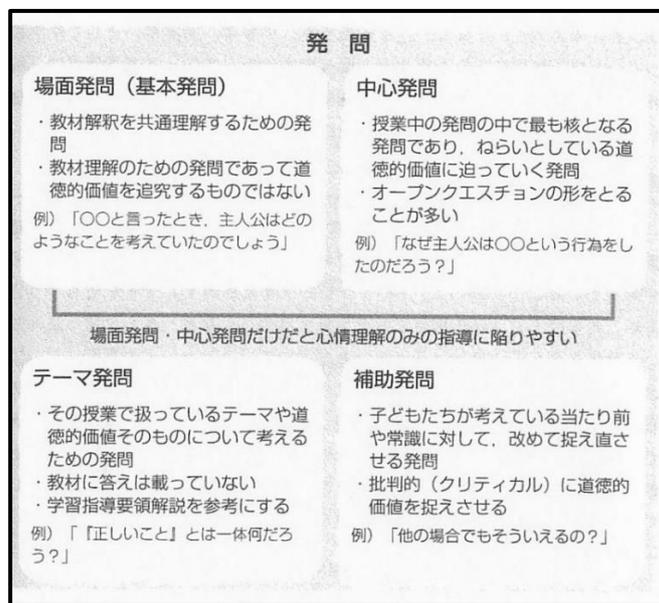


図2 道徳科の発問（荒木 2021 : p. 71）

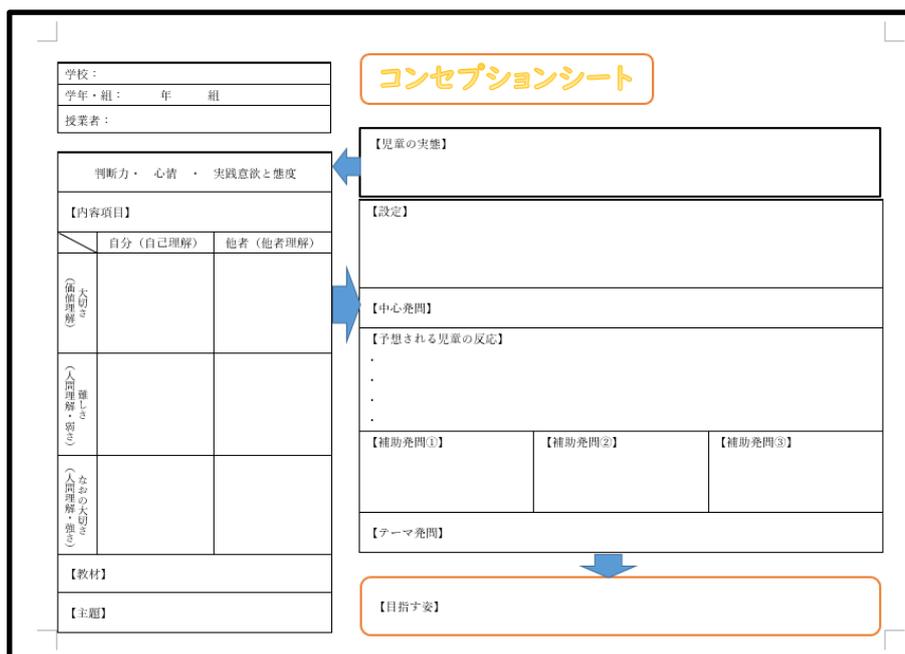


図3 コンセプションシート

③ 道徳科の評価

道徳科では、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点」（文部科学省2018：p. 110）を評価することが示されている。この2点を評価するという事は、すなわち、「自己を見つめる活動」「多面的・多角的に考える活動」を取り入れることに繋がり、この2つの学習活動を関わらせながら行っていくことが「道徳的諸価値についての理解」と「自己の生き方についての考え」を、深いものとしていく（文部科学省2018：p. 110）。これは、まさに本研究が目指すところである。

しかし、3.2.1.の②発問の工夫で述べた、考えの深まりが見られない児童がいることの要因の1つには、本校の授業は2つの学習活動および評価がじゅうぶんに意識されていないことが考えられる。

そこで、T.T.で授業を行う際には、T2が児童の発言を記録して授業後にT1と共に分析する取組を行う。この取組を通して、評価から次時の学習活動への繋がりを意識できるようにする。

3.2.2. 道徳科と他教科等との繋がりを高める取組

道徳科と他教科等との繋がりを高めることを目指し、本年度は次の2点を繋がりの視点とする。

- ④ 道徳学習プログラム
- ⑤ 道徳教育の評価

④ 道徳学習プログラム

本研究では、令和4年度に実施した道徳学習プログラムが、教師の側から見たもの—いわゆる道徳教育プログラム—に留まり、児童と共有されていなかったという反省を踏まえ、児童が自身の考えを振り返ることができる「かがやきチャレンジプログラム」を作成した。

実施した結果、「(1)児童だけでなく、教師も道徳科と他教科等との繋がりを意識することができた(2)児童の道徳性の高まりを見取ることができ、評価に繋げることができた」という成果があった。一方で、「(1)各単元ごとの問いを予め考えておくことが不十分だった(2)プログラムの内容や順番について改善が必要」等の課題が挙げられた。

そこで、今年度は以上の課題を踏まえた改善の視点を4つ（表2に示す）挙げ、新たな型を示すこととした。

表2 かがやきチャレンジプログラムの改善の視点

	改善の視点	詳細
1	内容	同時期に児童生徒に関わる複数の教員が意識して指導を行うことの効果も考えた上で、専科との関わりも含めた内容の見直しを行う。
2	順番	道徳科での児童の気付きを促し、思考が深まること、生活との繋がりを意識できることを目指し、道徳科の前に共通体験を仕組む等、順番を考える。
3	単元（教科）ごとの問い	単元を貫く道徳科の内容項目と各単元の内容を関わらせた問いを予め設定しておくことで、振り返りやすくする。
4	評価場面の焦点化	「どの場面で見取るのか、道徳的諸価値への理解を深めていく姿がどのような姿で表れるのか、いつ振り返らせるのが良いのか」を予め考えておくことで、評価と指導を効果的・効率的にする。

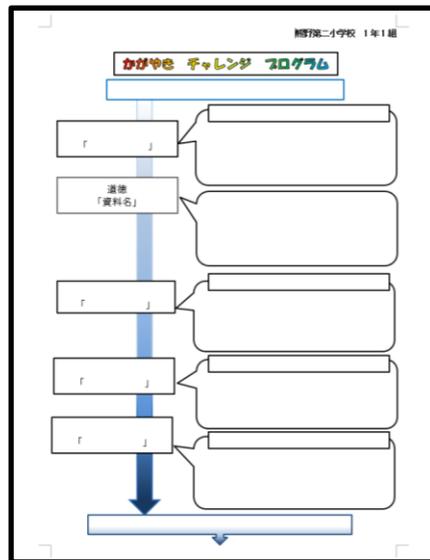


図4 令和5年度の課題を踏まえ改善した、かがやきチャレンジプログラムの型

⑤ 道徳教育の評価

令和5年度は、かがやきチャレンジプログラムの期間、抽出児の言動を見取り評価する取組を行った。このことは、3.2.2.の④に述べた2つの成果に繋がっている。一方で、2つ目の成果である評価が、児童への直接的な評言や道徳科の指導にじゅうぶんに生かされたとは言えない。そして、そのことが、児童が道徳科の授業と生活との繋がりを実感しにくいことに影響を与えていると考えられる。

そこで、今年度は、かがやきチャレンジプログラムの期間に行った抽出児の言動について肯定的に見取った姿を、道徳科の授業の導入や終末に取り入れる等、評価を指導に生かしていくこととする。

3.2.3. 学校内外の繋がりを高める取組

道徳教育全体の充実を目指し、本年度は次の視点を取り入れる。

⑥ コミュニティ・スクールとの関わり

本中学校区は令和2年度からコミュニティ・スクールとして教育活動を行っている。コロナ禍においては難しかった地域協働活動もコロナ禍が明け始めた令和4年度から徐々に増え、町を挙げて取り組んでいるところである。本研究においても、昨年度、地域の人的・物的資源を活用したプログラムがいくつか見受けられた。しかし、それらの取組を含め、地域との協働が道徳教育の充実を生かされているかという点、じゅうぶんとは言えない。

道徳教育の充実には児童の実生活の場である家庭や地域社会との関わりが欠かせないことは、文部科学省（2018）においても、「保護者や地域の人々の参加や協力などが得られるように工夫することが大切」（p.80）と述べられていることから分かる。地域の願いを受け止めながら、地域と共に児童生徒を育てていくというコミュニティ・スクールの理念を道徳科および道徳教育において意識し、実践していくことで、本研究主題の実現に向けて大きな効果を上げることが期待できる。

そこで、今年度は学校内外の繋がりをさらに意識し、道徳教育を行っていくこととする。なお、学校内外の繋がりを意識した教育活動の具体例として表3を示す。

表3 学校内外の繋がりを高める道徳教育活動の例

	具体例	留意点
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> 公共施設や地域のお店等、地域資源の活用 地域の方も参加する学校行事 地域貢献活動 等	実施に際しては、どの活動においても、プログラムを貫く道徳科の内容項目について、地域の方の願いを聞く等して、事前に連携を図る。
道徳科	<ul style="list-style-type: none"> ビデオレター ゲストティーチャー 地域の方や保護者対象に行ったアンケートの提示 地域の人への手紙を書く 等	

4. 研究仮説

教師が道徳科を中心としたプログラムの中で様々な繋がりに着目した道徳教育を創造していけば、道徳的価値に関わる事象について自分と関わらせながら考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒を育成することができるであろう。

5. 研究の内容

- 道徳科の授業づくりに関わる理論研修
- 繋がりを意識した道徳科の授業づくり、および道徳学習プログラムデザイン
- 「道徳教育推進拠点校地域事業」の連携校（熊野東中学校・熊野第四小学校）との連携
 - ・ 東中学校区道徳推進協議会における合同理論研修・指導案検討
 - ・ 推進リーダー教師と連携校によるティーム・ティーチングの授業実施および道徳教育推進に関わる情報の共有

6. 年次計画

- (1) 1年次 / 前年度
 - ① 「道徳的価値」及び「発問の工夫」等、研究全般に関する理論研究
 - ② 「主題解釈」の研修実施
 - ③ 道徳科の授業実践
 - ④ 研究の方向性及び内容の吟味と修正
- (2) 2年次 / 今度
 - ① 1年次の成果と課題をもとにした授業改善
 - ② 授業実践
 - ③ 研究のまとめ

7. 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
・ 児童生徒は、自己の生き方について考えを深めることができたか。	・ 教師の授業内容（実践記録を含む）評価（行動観察、ワークシート）
・ 繋がりを意識した道徳科の授業づくりは、自己の生き方について考えを深める児童生徒の育成に有効だったか。	・ 教師対象の意識アンケート ・ 教師の授業内容（実践記録を含む）評価
・ 自己の生き方について考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒を育成することができたか	・ 拠点校事業意識調査 ・ 抽出児行動観察
・ 道徳学習プログラム（かがやきチャレンジプログラム）の活用は、自己の生き方について考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成に有効だったか。	・ 抽出児童の道徳学習プログラム（かがやきチャレンジプログラム）振り返り記録、抽出児行動観察

8. 検証計画

4月	研究主題・検証計画立案と提案 第1回アンケート調査実施（児童生徒・教師）
5月	第1回アンケート調査の分析と考察・抽出児童決定
6月～7月	研究授業の実施
8月	1学期の実践記録の分析と考察
9月	第2回アンケート調査実施（中心校児童・中心校教師） 第2回アンケート調査の分析と考察
11月	研究授業の実施 2学期の実践記録の分析と考察
12月	第3回アンケート調査実施（児童生徒・教師）
1月	第3回アンケート調査の分析と考察
2月	研究のまとめ・次年度の計画立案

9. 検証のための実践計画

月	日	研究内容
4	4	校内研修…研究推進計画・学習指導案型提案・授業者決定
4	10	道徳部会連絡会
4	10	◆東中学校区道徳教育推進協議会①…研究の概要、協議 (参加者：校長・宇田)
4	25	校内研修…コンセプトシート、資料決定、評価
5	9	校内研修…模擬授業・指導案検討、授業研究日程調整 等
5	30	校内研修…コンセプトシート作成（7/1授業分）
5		道徳部会連絡会
6	7	第1回研究授業（〇年1組）(T2：推進リーダー) ◆東中学校区道徳教育推進協議会② ※熊野町道徳教育推進協議会①を兼ねる
6	20	校内研修…模擬授業・指導案検討
6		道徳部会連絡会
7	1	第2回研究授業（〇年1組）(T2：推進リーダー) 広島県道徳教育研究協議会
7	4	校内研修…コンセプトシート、指導案作成
7		道徳部会連絡会
8	2	合同研修…指導案検討、理論研修、研究会授業の模擬授業等 ◆東中学校区道徳教育推進協議会③（参加者：東中学校区教員全員）
8		校内研修…研究会の指導案修正・研究会計画準備
8		校内研修…研究会の指導案修正・研究会計画準備
9		道徳部会連絡会
10		道徳部会連絡会
11	5～7	道徳参観日
11	22	公開研究会、研究授業（第二小：〇年1組、〇年1組、〇年1組/第四小：〇年〇組 /東中：〇年〇組）
11	28	校内研修…指導案検討
12		たんぼぼ学級研究授業（たんぼぼ1組・2組）
12		道徳部会連絡会
1		校内研修…第3回研究授業模擬授業等

1	29	第3回研究授業（〇年1組）（T2：推進リーダー）
1		校内研修…研究のまとめ
1		全体研修…事業計画、完了報告等確認、実践発表 ※熊野町道德教育推進協議会②を兼ねる（参加者：校長・中村）
2		道德部会連絡会
3		校内研修…令和7年度に向けて

【引用・参考文献】

浅見哲也（2021）「道德科 授業構想グランドデザイン」明治図書出版株式会社.

荒木寿友（2021）「いちばんわかりやすい道德の授業づくり対話する道德をデザインする」明治図書出版株式会社.

木原一彰（2021）「第22章 各教科等との連動による相乗効果で道德教育の可能性を開く」『新道德教育全集 第3巻 幼稚園、小学校における新しい道德教育』株式会社学文社、pp.186-187.

永田繁雄（2017）「平成29年版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 特別の教科 道德」東洋館出版社.

藤原光政（2019）「『道德教育』PLUS 考え、議論する道德をつくる新発問パターン大全集」明治図書出版株式会社.

宮里智恵（2022）「あらためて知りたい教材分析法 心情曲線を生かした教材分析」『道德教育 10月号』明治図書出版株式会社.

文部科学省（2018）「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道德編」廣済堂あかつき株式会社.